

# 一先輩の忠告

平 間 洋 一

「最近毎年卒業後数人の学生が我々の仲間より去って行く」というニュースに接し深く心を痛め落伍者に憐みと同情を感じている一先輩としてこの一文を草する。

この事については諸弟もすでに指導官として勤務している同期の諸兄から色々聞いているとは思うが、私は他の同期生に比してこの浮き世と自衛隊生活の両面を多少とも体験し知っている者として、両者の相異、感じた事どもを、私の背景となる自己紹介をしつつ、その環境においていかに感じ生きて来たかを中心に綴ってみたい。

我々二期生防大に入校した時、現在の諸弟程防衛大学を理解もしていなかったし、国防とか国家等についての深い関心もなく、唯何となく入校し、マスコミの鋒先も、世間の風当りも今より数段と強く、自己の職業に対しても自信なく、不安な苛立ちと劣等感を抱きつつ卒業してしまつた。

在学中に接した指導官、乗艦実習中に接した多くの士官も、唯大声を張り上げ、何かと田舎臭く、実施部隊の雰囲気を我々に強いるが故にギャンプを感じ、乗艦実習も一々二週間散々不眠不休でしぼられ、船には酔い、訓練終了後の座談会には「昔の海軍で

は」とか「海兵の生徒は……」の言葉に「敗残兵の分際で」とか「敗軍の将、兵を語らず」と散々毒舌を吐き、「案ずるに、自衛艦には娯楽設備が全然なく人間性に欠けている」

「士官と下士官の制服が違うのは民主主義に反する」等という議論を残し、引卒の指導官は冷汗百斗、艦長初め艦の士官を烈火の如く怒らせ、自分も自衛隊に対して幻滅と失望の念を抱いて船を去つた。

愛国心や国防意識も綺麗にロッカーに入れたまま、点検時にすらすら述べる程度にして、E S Sの活動や卒業アルバムに全力を集中、訓練部、指導官とは絶えず激突、自由奔放な大学生らしい防大四年間の生活を送つた。

そして莫然と防大を卒業、夢遊病者の如くふらふらと江田島に流れ着き、防大当時こそ電気工学とかいう学問に接し、真理の探求、思索する暇もあつたが、こちらでは学問とは程遠い一種の雑学、魚雷、機雷、砲術、機関、手旗、発光、加えるにカッター、マラソン、棒倒しと課業の連続、候補生と雑布は絞る程良いとのモットーに絞られ、睨まれ、卒業式には「二度と来るものか」と接橋を蹴って卒業、練習艦隊、遠航を経て実施部隊に配属になつ

た。

そんな自衛隊に対し、軽視していた先輩に対して愛着を感じ、尊敬の念を抱くようになった転機は遠洋航海であり、実施部隊配属後からであり、更に外語大に来てこの確信は不動となった。

遠洋航海は愛国心と旧海軍の偉大さ、そしてその歴史を研究しようという動機を私に与えた。

家を離れて初めて親の有難味、家庭、故郷に対する愛着を感じるとか。

国を離れて初めて祖国とか母国とかいう言葉を実感として体験出来た。

そして実施部隊では自分を散々追い廻した教官と共に苦業を分かち、部下を持ち、人の上に立つ身となって初めて指導官の立場も、又愛情「可愛いから怒る」という心境も初めて理解出来た。訓練に暮れた艦隊一年半の生活。

寒風肌を刺す艦橋夜間当直、ローリング40度の悪天候下の航海、台風と戦い、一瞬の気のゆるみない毎日、肉体的にも疲労の限度に達し、神経を磨り減らし、上陸して街をサツソーと歩く背広姿のサラリーマン、点滅する青赤のネオン、往き交う美女の群、目を驚かさずデパートのショーウィンドを珍らしげに眺め、何を望んでこのように恵まれぬ仕事を選んだんだ。

誰も知らない海上で、理解も受けずに、自から好んで忙がしい訓練を計画し、家庭を離れて寿命を縮める生活、他にも仕事は山程あるのにとつくづく考えた。

苦しい艦隊生活も一年半、「帽振れ」の号令で追い出され、昨年四月から大阪外大フランス語研修生として娑婆での最初の一年

を、ネオン輝き、美女の往来多き大阪は鶴橋の近くの貧民窟に学生、サラリーマン氏等五人と一緒に下宿。

又今春よりは高級住宅地芦屋（俺の家は例外で残念だが）に住み三十万円の犬小屋だの十万円の犬様だのを横目で睨んで半年が過ぎようとしている。

制服は着任挨拶の時に着ただけ「日の丸」は給料日にしか見られぬ完全な町人・大学生の生活、連続二十日の安保反対スト、学生運動をその渦中に感じた。更にサラリーマン氏との同宿で会社の事も又下宿附近の低所得者の生活。芦屋に於ける比較的上層の人々の生活、思想、雰囲気等このように艦隊生活、娑婆の生活との両面の苦しみも比較的豊富に味えたと思っている。

そして以下が防大卒業以来感じた所感であり、君達には是非知ってもらいたい点である。

まず自衛隊で良いと感じる点。

- 一、人事の公平
- 二、クラス愛
- 三、上下の真の愛情

悪い点

- 一、給料が安い。
  - 二、転勤が多く、家庭的に恵まれぬ。
  - 三、文官優位が絶対的である。
- 人事の公平、狭い艦内で起居同一の生活では社会一般に通用している人生の遊泳術は通用しない。

血縁関係、財力、親の地位も、唯実力だけが、それも転々と勤務地を交える毎に接する上官による評価では自然に公平になる人

事だけが我々を決する。

外大に來ている他の官庁、会社の委託學生が益、暮に「御中元」「お歳暮」の心配をし、出世のために自己の意見も押さえ、一つの椅子を巡ぐって激しく争う同輩に囲まれているサラリーマンの現実。

組織が自衛隊に比べて小さく、仕事も単調、同一場所で同一上役との接触、景気、不景気の波、そこには利益を追う社会の厳しい生存競争がある。

利害を超越したクラス愛、我々江田島卒業後防大や一般大学出身者と八期生のクラス会を作った卒業時こそ、その必要性も痛感せず、協力も消極的であったが今では四周年を迎えんとしその機關誌も回を重ねると共に立派なものへと発展している。

我々艦に乗っている者から陸上で事務を取っている者まで雑多だが各人その個性を生かし利害を超越した社会を形成している。このクラス愛と自衛隊の良さも在学中には仲々実感として感じ得ない。

大阪に來て、俺が海上自衛隊だというだけで、上は社長から下は工員、三十台の人から日本海々戦に参加したという老人まで、士官も兵も、食事やお茶に呼んでくれた。

そして自分の同僚が高官にまで出世し自分は少佐で停年になりながらも、自分を首にした海軍に対して怨み一つ言う事なく「海軍は良かった楽しかった」とほめるのは海軍も立派だったがその軍人も又立派だったのだから。

現在の海上自衛隊には確かにこのような旧海軍の教え切れない長所も残っている。

私は現在の海上自衛隊を論ずる前にその母体である帝國海軍を充分知るべきだと主張したい。

諸弟の多くは、私達もそうであったが、「昔は」との言葉には抵抗を感じる事だろう。

無理もない、あの海軍は完全に破れたし、又欠点もあつたら。

しかし同じ破れるにしてフランス艦隊の如く母港にその残骸を残し、イタリヤのように国破れて艦隊在りというような不名誉を我々の先輩は残さなかつた。

世界を相手に戦い、元師2、大将5、中将58、少将252、併せて三百十五名の将官が倒れ、四百十隻が沈み、二万六千機が落ち、四十万九千人が斃れた、そこには多くの伝統や、武士道や民族の美くしさを後世に伝うべき多くの教訓が史実があるはずだ。

敗戦間近い呉軍港で卒業したばかりの候補生に將來の日本の礎になれ、海軍の最後は我々にまかせろ、と二年半近い戦に疲れた老兵達が國破れて艦隊残る不名誉を後世に残すまいと残余の艦を率つれ、片道分の燃料で一機の護衛ない死の海に消えて行った大和の最后程大海軍の栄光と苦悩、その美くしい臨終を表徴するものがあるまい。

現在の世論はその不合理性を、人間軽視を非難する者が大多数であらう。

武器を取られ、言うにペンなき軍人を又過去を批判する程言ひな事はない。

俺も、大和も人も惜しかったと思う。しかし敗戦後、大和以下艦がその雄姿を桃野原の呉軍港に見る家々村々にはどうも

じたであろうか。

戦争には、自称文化人インテリ以上に反対した海軍であつては  
みても、始まれば死力をベストを尽くして戦うのが軍人の義務で  
あり本分ではなからうか。

先HNHKのテレビドラマ特攻隊をテーマにした「遺族」とい  
うのを見たその時、「特攻隊をどう思うか、又敗戦の発表をどう  
いう気持で聞いたか」とアナウンサーに聞かれた某社会党議員が  
「自分は何かほっとした。もう我々の新らしい時代が来るとい  
うか、何かさっぱりした、前途の暗雲が一時に消えたような解放感  
で一杯でした」と語っていたが、これが現代の文化人、進歩派を  
代表する一つの代表的風潮ではないだらうか。

あの戦争には自分は関係なかつた、自分は戦争の犠牲者であ  
り、あの戦争には心中反対であつたが弾圧が激しく、一部軍部の  
指導者が国民をだまして初めたんだと考える事によって自分の責  
任を転嫁し、良心を欺瞞する。

そして戦を憎む余り、死力を尽くして戦い敗れ、今は剣もペン  
もない無力の軍人に又遺族に対してまで非難を向ける。

しかし今政治を動かしている政治家、官僚、又文化人、インテ  
リがどれだけ真剣に生命を賭して反対しただらうか。

あの当時のドイツ物の流行、私の習っているフランス語の教授  
が「当時ドイツ語科の鼻息は想像以上、ドイツ学以外の学問特に  
フランス語等というと固体に合わぬと談話し、ナチ哲学一本のド  
イツ文学者達、学問の自由を叫ぶべき学校の中にも、このように  
時代に迎合しようとする流れがあつたのです。」

東洋平和、米英撃滅、大和魂を煽動した学者、政治家が今なほ

教壇に立ち政治を動かす今では或る程度進歩的と言はれた方が何  
かと好都合だし、大衆に迎合して「平和」「平和」と叫び革新側  
に属している。

むしろそのような人達の方がどれだけ国を誤まり国民を害した  
事だらう。

何故ペンも剣も取られ無抵抗な、政治力も何もない唯国の為と  
戦つた老兵に厳しく、戦後主義、思想をコペルニクスの転換した  
文化人、マスコミに甘いのだらう。

そういう人が多過ぎるし又他人を批判する事はスネに傷持つ自  
分にも不利だからである。

このように時流に迎合し、大衆にへつらい自己の評判を気にす  
る文化人の方が私は国を滅ぼす者であり国を害する人だと思ふ。

横道にそれたがかくのごとく我々の先輩は立派に戦いそして武  
士らしく我々に大きな遺産と教訓を残して桜の花咲く春四月、沖  
繩へと大和以下の最後の突撃を決行、散つて行つたのであつた。

その他敗戦の報と同時に特攻隊産みの親と自己共に許していた  
大西中将の自害、又九州の特攻隊基地長官宇垣中将が敗戦を聞いた  
瞬間身を以つて部下の散つた沖繩の敵中に消えた。

レテイ沖海戦に自から阻に甘んじた小沢中将、戦前ではイギリ  
スの潜水艦学校の教科書に残る佐久間艇長の物語。

我々は優れた先輩、遺産、を数え切れない程持つてゐる。

我国でこそ知られていないこの大海軍も海を渡り対した好敵  
手アメリカ、イギリス、フランス海軍の間には燦然と輝いてい  
る。

各国の海軍関係の雑誌を開く時、そこには毎号必ず日本と戦つ

た戦記が教訓が斃っている。

さて諸弟の将来はどうだろうか。

先日海兵出身の或る人が「この頃、他官庁、防衛庁の文官等と交渉したり討論する機会も多くなったが、我々海兵・海機出身者なら道さへ違はなければ東大位入っていたらどうという自信もあるし、相手も海兵・海機の社会的地位を知っているが故に我々も敬意も受ける。

だが防大出身者が今後東大出の多い文官に対してどれ位やっけて行けるか。

現在では海軍士官と言ってもかつてのような社会的地位もないし、我々より不利だ。今のような文官絶対優位、文官オールマイテイの悲哀を味うか否か、全く君等の今後の精進と努力に掛っている。」と話していた。(我々文官優位の大原則に反対する者ではないが過去の軍閥政治を恐れる余り極端な文官優位が存在して、部僚の実情を以て無理な要求、計画が立案された例も多い。)

諸君が文武両立の正しい軍隊地位を築けるか否か、それは現在の日本を動かしている一流の政治家、財界人、学者に対して遜色ない教養が、人間が防大で出来るか否か、それが自衛官が単なる消耗品、道具にせざるか否かの分かれ目になるのではないだろうか。

諸君しっかりしてくれ!!

諸弟の前途は諸弟の手にあるはずだ。

さて最後に蛇足ながら自衛隊の必要性について述べる。

第二次大戦後我々は、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼し又人間相互の関係を支配する崇高なる理想を自覚するが故に国

の安全と生存を上げてこれに記した。

その当時には確かにそのようなムードが国際関係にあった。

しかし二十年の時間的空間が世界を尖鋭に対立する二つの陣営に分裂させ、そこに君臨するものは不信と憎悪——暴力がその相互関係を支配する世界と化した。

一切の暴力を否定するが故に甘んじて自身を虎狼の生役に捧げ求めて滅び去る絶対無抵抗のストリップ平和論に祖國の運命と同胞を置くに忍びない。

日本の主権、独立を犯すには相当の犠牲と覚悟を相手にさせるだけの重備なくして、国際社会での正当な発言権もない。

平和は創らるべきもの、国民個々の努力を重ねて、自から創造すべきものでこそあれ、他人の善意に頼り、情けにすがってその授け与えられるを待つべきものではない。

「祖國防衛は国民の崇高なる義務である」——ソビエト連邦共和国憲法。

私が卒業間近であったある日、元首相吉田茂氏を級友三人で自宅に訪問した時、最後に話された言葉を引用してこの結びとしたい。

「諸君に対する冷い目は未だ当分続くだろう。

だが君達が暖たかく迎えられる時を想ひ起こしてもらいたい。水害、災害、そして国家が減びるか否かの危険な時だけなんだ。

君等にばかり苦勞を掛けてすまぬが君等が冷遇されている時の方が国民は幸福なんだ。

『百年兵を養うは一日の為なり』と今敗戦に続く社会的混乱、国際政治の複雑さ等から又過去の痛手が大きいだけに、昔、今日

の事、明日の事で一杯なんだ。百年先を考えるだけの余裕がないんだ。苦しい事も多からうがこの事を忘れてないで欲しい」と「治に於いて乱を忘るな」と色紙に書いて手渡された。

確かに我々の前途は容易なものではない。しかし家柄、学歴、コネクションによって左右される社会、男と生れ、自己の才能を押し潰さざれば、無視される程みじめな事はあるまい。

パンなくして生きられないが、我々またパンのみでも生きられない事を銘記すべきである。現在でこそ史上最大の人手不足、防大を卒業すれば一技術者として今の我々よりも好条件で採用され、生活には困るまい。

だが十年二十年先を考えろ、この好景気がそう長く続くだろうか。

人生は長い目で見るべきもので目先だけの利益に捕らわるべきではない。

公正な人事、利益を度外視したクラス愛、上下の真の愛情という事は在学中には気ずかぬ。卒業し自衛隊に入り、自衛隊を離れて初めて判る事だろう。

だが我々の前途には困難な道が続いている。しかし共に手を取る我々同期、同輩の団結は固く、又我々の社会には不正不平等はなく、物質的なものが得られる事が少なくも精神的な満足感が我々の仲間にはある。

お前達が山の上から見下ろしている社会の空気は小原台程澄んでいないし、実力や純心さだけで決して割り切れる社会ではない。

外界の荒波から護られた温室で育った諸弟が現実の社会等、判

かるはずはない。

つまりらぬ事に悩む前に、本の一冊でも読んで教養を付けて置け、部隊に來るとしてもそんな暇はないからな。

（一期生 海幕 大阪外語大 仏語研修生）

前述のとおり興るべき明治の海軍にも、世界一、二を争う米英の海軍にも組織の老化を妨げる若い士官の意気、気迫、パイタリテイがあった。

われわれに必要なものは海上自衛隊はわれわれで作り育てるという意欲であり、気迫、さらに表現を強めるならば自己より海上自衛隊を愛するという純粹な気持ではなかるうか。

万博の標語は「進歩と調和」であったが、海上自衛隊に必要なものは進歩であり、革新であり、われわれ中堅幹部の独創力とそれを実現する行動力であると思う。

#### 四、新しい武器とセクションナリズム

Senser・通信手段の発達、武器の有効射程、破壊力の驚異的増大は CAP・JAMMER・CHAFF ミサイル砲と幾重にも連なる対処武器を必要とし、ここに武器体系、武器管制という思想が生れた。

しかし各科の面子や縄張り争い、自己の術科に対する狭隘な愛情に妨げられ個々の武器をシステムとして組合せ、その全能を発揮するような術科区分や艦内編成とはなっていない。

今こそ明治以来変らぬ一分隊、二分隊等の艦内編成に再検討を加え、武器体系に合致した、武器体系中心の艦内編成に改編すべきであると思う。

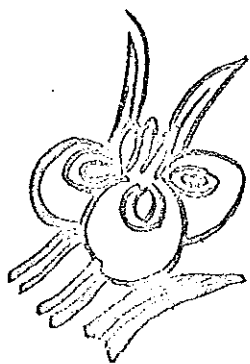
さらに、新しい武器は新しい教育、戦術をはじめ

TEAMS (故障発見システム) 部品ユニット交換、補給の

COSAL 化をはじめ造修、補給等の分野にまでその改善を進めなければならぬが、それだけに各部の利害の対立を生じ勝ちであろう。

リリックパー中將はポラリス体系を確立する技術的困難より部内の異なる意見、対立を解消する方が難しかったと述べている。

各部各科の利害、面子等の対立をわれわれのところでは解消するだけの力をわが八期は持ち、新しい思想、組織で新しい武器を運用し、その武器の、武器体系としての最大能力を発揮したいものだと思う。



この衰えを見せない海軍ブームが続くのは何故であろうか。それは三国同盟に、戦争に強く反対しながらも、戦を命ぜられれば主戦投手として、空母機動部隊をはじめ、航空機による戦艦撃沈、Out Range 戦法と独得な戦術戦法を駆使し、ハワイ、マレー、ガダルカナル、沖繩と戦い、戦局不利となるや、神風特攻隊、回天、そして最後には大海軍の象徴「大和」まで特攻作戦に投入する全力投球をし、敗戦確定となるや、陸軍を押し、総理大臣鈴木貴太郎大將を主とする終戦工作、そしてあれだけ

激しく戦った海軍の一糸乱れぬ敗戦時の美事を統制。

伊藤正徳氏の言う「良き人間、良き仲間、スマートで目先のまき、海軍の先見性等に対する尊敬にあつた、思う。

しかし同じ旗を仰ぎながら、現在の海上自衛隊はどうであろうか、戦術の基本である単縦陣（Line of Column）を単縦列と直訳し“Base Course”と“Guide Course”との差異に議論百出、最後には米海軍の見解によればと一寸英語のできるアメリシンの一言に万事を決する主体性のないAP万能が、すでに二十数年続き、艦上にはスエーデン製のBOFORSからスイス・イギリス・アメリカ製の各種兵器が万博武器展示会場の如く並び、そこには何一つ独得な武器も戦術もない。

幹校評論は一佐又はOBの記事に終始し、若い少佐以下が、*“Global”* なセンスで活発に議論するアメリカの *Naval Institute* やフランスの *La Marine* 等の雑誌とは対象的である。

明治初年北方領土「千島」の重要性を叫び七隻のカッターで

品川を漕ぎ出しエトロフに渡った群司中尉のバイタリティーや回天の採用を強固に上申し海軍大臣を最後に説得させた黒木中尉や仁科少尉の憂国の情、愛国の至情、そしてこのような行動力がわれわれに、またそれを認めるフレキシビリティが今の海上自衛隊にあるであろうか。

潜水艦へのミサイルとう載の着想を上司に提出したが認められず、海軍部長に直訴しポーラリス体系を築きアメリカの、いや世界の戦略を変えたのはリコツパー中將が少佐の時であり、そのポーラリスの固形燃料化を提起し開発のイニシアティブを握ったのは二十八才の中尉であつたと聞く。

Angle Deck VTOL HARRIER Harican Bow Gas Turbine  
Horrier 等独得な武器を持ち戦術を持つ英海軍で強く感ずるものは若い士官の気迫と組織の非固定化である。

陸上自衛隊をみても61戦車、61小銃、対戦車ミサイルMAT、P-30ロケットと続々国産兵器を装備し、ドイツ、フランス陸大を卒業した級友がすでに幹部学校教官として発令され（防大三期の教官を含め、すでに十名を越える）新しい戦術が若い士官の間から創造されようとしている。

陸上自衛隊は泥臭く、アメリカはヒッピーにむしばまれ、イギリスは傾陽の老国と言うのは自由である。

しかし、われわれは旧海軍の偉大さ、栄光に支えられ形骸化された伝統に唯すがりつき、自分達まで偉くなったような錯覚を持つてはいないだろうか。



# 海幕勤務雑感

海幕 調2

平 間 洋 一

## 一、着任報告

念願かなって、やつと乗れた船を一年で降ろされ、四食昼寝、士官室係付きの段様の生活から三食自前のわびしい海幕生活に突き落とされてから、足掛け二年、通算四七日の歳月が過ぎた。

毎朝、「食事用意宣し」の士官室係の声に「オー」とか言つて起きていた大船務長殿も、今では五時半、女房のややヒステリックな声に起こされ、五時五十分自宅発、「十七時三分に電気が消え、ハサミとノリがあれば動まるよ」と言われて着任し

た調査部を七時から八時に退庁、ミニヤパンタロンを横目に、空腹を我慢しつつ、サパークラブ・「キヤラバンサラエ」の前を通り、焼鳥屋の角を曲つて地下鉄六本木着、銀座、新橋は地下から地下と通過、ドブねずみのごとく、ネオンも見つに九時から十時頃自宅着。

「長崎は今日も雨だった」と長崎の町を、「一に三菱、二に県庁、三、四がなくて五に「あまつかぜ」とやや落ちる店の上客として闊歩していた昔が懐かしい。

## 二、艦隊勤務者を優遇すべし。

娑婆のマイホームムードが音もなく艦隊にも流れ込み、一、二曹の帯妻者で艦隊希望者は目下急激に減少中、分隊長面接時の泣きどころだ。

細かいことは判らないが、「定時退庁、明かるい家庭」をスローガンに当直もあまりない陸上勤務の方が三日に一回当直、出港の多い艦隊勤務者より、二曹以下なら営外手当を含めれば年間所得が多いそうだ。

マイホームムードの中で、経済的不利益、上陸回数が少ない不平不満を馬耳東風と聞き流し、指揮官の優れた人格よりじみ出た統卒で、早朝訓練にはじまる厳しい訓練を行なえというのだから厳しいよ。

航海手当の増額、艦隊手当の新設、人事取扱上及び厚生面からの優遇策等、特別の施策を講じない限り、今日昭和十桁の戦中派先任海曹によつてかろうじて保たれている艦隊の術科練度は落日の勢で低下するであろう。

「幹部の名統卒に毎年一生懸命やってみようが、入隊以来十八年、一年毎に代る幹部は良いが、乗りつぶされる馬のことも考えて下さいよ」と不平一つ言わなかつた先任海曹の言葉が耳から聳れない。

どうか経捕関係の諸兄、艦隊勤務者の優遇策を考えてくれ、精強な艦隊を作るために!!。

## 三、伝統とバイタリティー

戦後二十六年、滅びし帝国海軍への尊敬とあこがれは一向に衰えることを知らず、最新では「明治日本の文化遺産」という言葉さえ聞かれる

さんの崇高な行為は、永遠に消えることはないでしょう。

君達も成人し、どの道に進もうとも、お父さんの意志を継ぎ、自分個人のことだけでなく、兄弟、家族、社会、そして日本という國のことを考える人間になって下さい。不幸にして父なし子として育った君達兄弟ではありますが、君達の廻りには、何十人というクラスメートの父がいます。困難にぶつかった時、困った時、自信をなくした時、嬉しい時、父が必要な時には遠慮なく、

下さい。何時でも、何処へでも、何人でも出掛けて行きます。特に私は近くに

住所 横須賀市坂本町五ノ二五

電話 22局 六三七九